

福津ふしぎ発見



内陸の地にある 舟つなぎ石

市の北西部、西東区と梅津区の田畑が広がる地に「舟つなぎ石」と呼ばれる石があります。



▲西東区の県道沿いに立つ舟つなぎ石(写真右)

舟とは無関係である内陸の地にある舟つなぎ石。なぜ、このような場所に舟をつないだという石があるのでしょうか。

今から遡ること350年。江戸時代の寛文6年(1666年)、この地に塩田ができました。塩田になる前は、津屋崎橋付近から西東区付近までは入り海になっていて、勝浦浜から渡半島へと続く小高い砂丘は「海の中道」と呼ばれていました。この舟つなぎ石は、その頃、外海から入り海へと入って来た舟などを結びつけていた石なのです。

寛文11年(1671年)と元禄14年(1701年)に干拓が行われ、入り海は現在のような形になりました。その結果、石だけがそのまま取り残されたというわけです。

入り海の奥部であった西東区では昔、農家の副業として塩づくりをしていたそうです。

